

〈連載(152)〉

## フェリー客船情報2002



大阪府立大学大学院・海洋システム工学分野・教授

池田良穂

97年に、客船のプロ向けの客船情報年鑑として創刊した「フェリー客船情報」も、98、99、2000年と毎年発行を続けてきたものの、筆者の編集作業の時間的制約、慢性赤字、そのうえ筆者の怠けぐせもあって、ついに2001年には発行ができなかった。2000年版からは、割付や印刷屋との交渉を海事プレス社が引き受けてくれたものの、同年度版を発行した後に2001年版に向けて取材は続けていたが、筆はなかなか進まなかった。昨年も秋にさしかかった頃から、海事プレス社の担当者からの激励・叱咤によってようやく尻に火がつき、さらに大阪支社に配属された若手記者の全面的なバックアップによって重い腰が上がって、原稿書きと編集作業に没頭する日々を続け、昨日（3月16日）すべての原稿が完成して海事プレス社に引き渡した。

この年鑑は、1986年からほぼ毎年1回の割合で開催を続けて来た「クルーズ客船&フェリー研究会」のかわりに、もっと広い人々に客船の情報を伝えて、日本における客船振興の一助となればと発行を始めたも

のである。それまで筆者が発行していた客船ファンのための趣味誌ではなく、客船のプロ、すなわち船会社、造船所、監督官庁、旅行業者をメインターゲットに、さらに客船のユーザーでありかつ知識欲の旺盛なレベルの高い船ファンにも満足してもらえる情報誌ということ考えた。

日本の中で、客船の専門情報誌と言えば、日本旅客船協会の発行する「旅客船」が唯一のもので、他に本誌「共有船」がある程度である。他には、船の技術専門誌「船の科学」に時々客船が紹介されたり、軍艦中心の趣味誌「世界の艦船」等に専門的な情報が時々載る程度である。船の愛好者を対象とする雑誌としては「クルーズ」、「船の旅」「ラメール」などがあるが、一般向けでプロ向けの情報にはなっていない。

九州では、クルーズ客船やフェリーの専門情報誌がいくつか発行されて、新しい客船事業や経営、利用統計、法律の動向、客船の技術、話題の新造船まで幅広い情報を得ることができる。例えば、Cruise & Ferry Information、Fast Ferry International、

Seatrade Cruise Review、Cruise Business Reviewなどである。

それでは、日本の客船経営者や技術者は、いったいどのようにして国内外の客船に関する最新情報を得ているのか不思議に思うが、おそらくそれぞれの情報網を駆使して断片的な情報を収集し、独自の分析をして、その経営や客船の新造の時に生かしているであろう。しかし、それはなんとも効率が悪い。欧州のような専門誌があれば、最新情報の収集はだいぶ楽になるに違いない。そんな気持ちで始めたものの、年齢とともに加速度的に本職の仕事は忙しくなり、夜と週末だけの執筆・編集作業の根気も続かなくなってきた。

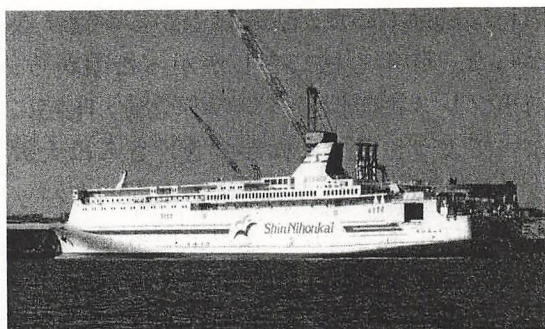
しかし、昨年末の日本における造船技術の専門雑誌「船の科学」の廃刊に接して、そんな言い訳を言っている場合ではないと思うようになり、約4ヶ月をかけた執筆、編集作業となった。

慢性赤字については、見かねた海事プレス社が「広告をとってみましょうか」ということになり、今回はじめていくつかの会社の協力を頂けることとなった。前述の「クルーズ客船&フェリー研究会」に参加されていたり、一緒に海外の客船事業の視察旅行に行かれた方など、比較的古くからお付き合いのある方が「それならば」ということで広告を出していただいた。心から感謝する次第である。

ところで、「フェリー客船情報2002」の編集をしてみて、改めて欧州水域のフェリー事業、客船建造が極めて活気に溢れていることに驚いた。30ノット級で3～4万総

トンの大型クルーズフェリーが続々と建造されているし、また40ノット近辺のアルミ製高速カーフェリーも大型化が進みトラックも登載できるバージョンがたくさん現われだしている。トレーラーフェリーとクルーズフェリーに分化していたものが、5～6万総トンに大型化して一体化し始める傾向も出てきている。電気推進を採用して「環境」「経済」「安全性」をキーワードにしたグリーンフェリー・コンセプトもユニークだ。

しかし、日本の中もなかなか棄てたものではない。新日本海フェリーがIHIで建造している新潟航路用の新造カーフェリーは、4月には第1船の「らいらっく」が就航するが「環境に」「人に」「地球資源」に優しい21世紀型フェリーとして脚光を浴びそうだ。入谷社長や造船所の協力を得て、同船のコンセプトを紹介している。



新日本海フェリーの次世代カーフェリー「ライラック」(撮影：福富 廉)

同船の内装設計にあたっては、欧米の大型客船の場合と同様に、総合コーディネーターをするデザイン会社が採用された。「サラ」という大阪の船舶デザイン会社で、その活動ぶりもレポートした。



客船にとって船内の空調はその快適性にとって重要なポイントである。現在、三菱重工の長崎造船所で建造中の11万総トン型クルーズ客船の空調を受注したのは、昭和ナミレイという堺に本拠地を置く会社である。デンマークの客船空調に実績のあるエンジニアリング会社と協力して、今回の受注に至ったとのこと。

同社の土屋社長と藤本常務へのインタビューでは、その積極的な姿勢に日本の舶用機器のエンジニアリングもなかなか健在であることを再認識した。

この他、架橋に対抗する元気印のフェリー会社の紹介もある。ワンナイトクルーズで注目を集めているオレンジフェリー、料金を下げて顧客を集めて配船数を増やすに至った加藤汽船、長崎の五島列島から進出して関西で活躍する五島産業汽船などの取材記事は、意外なところでピンチをチャンスに変えて果敢に現状に挑戦する船会社の姿勢を紹介している。

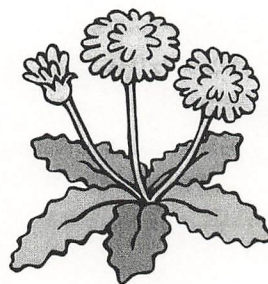
この10数年、大学から見ると、日本の造船界は官民ともにあまり学会や先端技術開発を大事にしてこなかったように思う。例えば、土木の世界では役所の人々が学会に

もしっかりと貢献をしているが、船の世界ではやや距離があるようにも見える。

筆者もいくつかの学会の役員をしているが、意外に役所の人协会会员になっていないし、いつか運輸省に入省した卒業生から学会への退会届があり、電話で聞いたところ「役所では学会に入っている必要はないという雰囲気だ」との答え。こればかりは本人が退会したいことからつい出てしまった失言と思われるが、アメリカやイギリスでは国の造船・海運政策に携わる造船技術者が主要な学会に入っていないことなど信じられないことではなからうか。

学会が、官とも民ともやや距離ができてしまったことが、新しい血が実業に流れにくくしているようにも思われる。そこで「フェリー客船情報2002」では、各種のシンポジウムや学会の動きもできるだけ伝えることとした。高速船シンポジウム、クルーズ客船シンポジウム、復原性ワークショップなどの内容とそこでの議論をできるだけ分かりやすい形でレポートした。

このような情報を満載した「フェリー客船情報2002」は4月末には完成の予定である。ぜひご一読を賜れば幸いである。



## 2002年4月発売 フェリー客船情報2002

編集:池田良穂大阪府立大学教授 発行:船と港編集室 発売:海事プレス社

定価:12,800円

日本および世界のあらゆる客船に関する情報を満載した「客船年鑑」の最新版。船会社、造船所、旅行者等の客船のプロから、船旅の愛好家まで、すべての客船関係者の必読書。97、98、99、2000年版に続く5冊目。主な内容は、

### ■2001-2002年日本の客船界の展望

- [1] クルーズ人口急増とスター・クルーズの日本撤退
- [2] 新クルーズ会社に期待するクルーズ産業構造変革
- [3] テクノ・スーパー・ライナーが小笠原航路で実現に
- [4] 失敗に学ぶ
- [5] 日韓フェリー航路開設が相次ぐ

### ■日本のクルーズ振興を考える

- (1) わが国における客船クルーズ振興に関する提言  
(社)日本外航客船協会・クルーズ振興委員会報告
- (2) クルーズ客船の需要予測法の提案
- (3) 世間は船旅をどう見ているか (山田迪生)

### ■環境に、人に、地球資源にやさしい21世紀型旅客カーフェリー「らいらっく」登場

### ■ロマンを求めて……(株)デザインオフィス:サラ

### ■高速船によるサービスで復活した

広島～別府航路 ソレイユ・イクスプレスの試み

### ■客船の「快適さ」をクリエイトする

エムシーアイ・ナミレイ(株)の空調システム

### ■21世紀型クルーズフェリー プライド・オブ・ロッテルダム

### ■21世紀型グリーンフェリー ニルス・ホルゲルソン

### ■関西造船協会主催高速船フォーラム報告 (坪井聖学)

### ■橋に挑戦するフェリーたち

- (1) ワンナイトクルーズで新需要を開拓する  
オレンジフェリー
- (2) ジャンボフェリーの愛称で知られる 加藤汽船
- (3) 長崎から瀬戸内に進出し健闘見せる  
五島産業汽船 (坪井聖学)

### ■海外の最先端フェリー技術

- (1) 単胴超高速カーフェリー開発のパイオニア  
ロドリゲス・エンジニアリング
- (2) 世界の高速船建造をリードする  
豪オースタル・シップス

### ■新造カーフェリーで活況 ギリシアのフェリー業界

### ■ 続々と登場するメガクルーズ客船

ポストパナマックス VS パナマックス

### ■視察旅行記 スカンジナビアの高速カーフェリー視察記

### ■国際船舶復原性ワークショップ出席報告 (梅田直哉)

### ■新客船産業創造のための安全性規制見直しへの提言

- ### ■客船の技術
- (1) ここまで進んだ商船の電気推進
  - (2) 客船の耐航性能とその経済性評価

### ■港とクルーズ 大阪港の取り組み (野瀬和宏)

### ■客船についての学生の提言 (梅田直哉)

### ■ 客船のニューフェース紹介

- (1) 日本の新造客船
- (2) 海外新造フェリー
- (3) 海外新造クルーズ客船

お申込みは「船と港編集室」まで直接

ファックス:072-270-0612

Eメール:0722700612@pipopa.ne.jp

〒593-8303 堺市上野芝向ヶ丘町1-23-1-420

船と港編集室

または海事プレス社(東京)、ツキジ書店(東京虎ノ門)、  
海文堂書店(神戸元町)へ。